

※1
近藤英也：明治三十八年、時の文部大臣久保田譲に請われて、宮崎県から豊岡中学校四代目校長となる、明治四十二年には高等女学校の校長も兼任。教え子には、太田垣士郎など但馬から優れた人物を輩出した。

今東光は大正4(1915)年、9月関西学院中学部(現関西学院高校)から豊岡中学校(現豊岡高校)に転学するが、同年の12月に退校処分となります。東光の自叙伝的小説『悪太郎』はその豊岡時代が舞台です。悪太郎が豊岡を離れるとき、車窓で近藤英也校長から生涯忘れ得ぬことばを贈られます。「失望する^{なか}勿れ」

40年後、東光が講演で母校を訪れた回想文が『みみずく説法』(昭和32年「週刊朝日」に連載)に記されています。そして、『みみずく説法』の文学碑(平成10年完成)が豊岡にあると知り、100年以上も経ちますが、『悪太郎』の風景と文学碑を辿り、その碑文を確かめるため豊岡へ向かいました。

2月24日、豊岡高校・達徳会館(県指定重要有形文化財)を訪ねてから、神武山公園の「みみずく説法」の碑を目指す。校舎の裏手に面した城跡の「歴史・文学のこみち」を進むと、坂の中程に寂寥とした木立に囲まれて四曲の花崗岩の碑があった。「海土屋」の欄干にもたれてながめると脚下を水量豊かな円山川がながれ白帆の行方をみるとはるか玄武洞、城崎温泉、日和山とつづいて、このうらびれた北国の風光は、失意の少年の胸を旅愁でかきむしるのであった」読み終えて写真に収める。一段落してから坂を進み本丸跡まで来ると、春浅い桜の木々の先に豊岡の街を見渡すことができた。

2月25日、豊岡市図書館で選書して頂いた郷土ゆかりの『太田垣士郎氏の追憶』(昭和41年)を閲覧すると佐藤栄作、松下幸之助はじめ、著名人が名を連ねるなかに、今東光の名前がある。回顧文「断感」には氏に大きな影響を与えた人物として近藤英也校長を特筆している。豊岡中学校の卒業生である太田垣氏が、近藤校長の神戸転勤を猛反対、当時の兵庫県知事に直談判するほどの熱血漢ぶりや、また東光が親友尾崎士郎を、氏に紹介した宴席でのエピソードが書かれていた。

また東光が転校当初に滞在した旅館「海土屋」は「大正時代の豊岡街図」には「あまや」とあり、小説に出てくる京極家武家屋敷、岡本医院、教員住宅などの場所も読み取れた。同じく『但馬今昔写真帳』(昭和34年)では、「海土屋」と特定できる佇まいも確認することができた。(企画展示「今東光 人生のことば」は9月10日(日)まで)

今度は、その街図を見ながら小春日和の豊岡の街を歩きたいと思う。(担当:木村)



「郷土資料-但馬の文学」コーナーには今東光 山田風太郎等の書籍が配架されている。



編集・発行：今東光資料館 tel.072-943-3810
〒581-0003 大阪府八尾市本町2丁目2番8号
八尾図書館3階

Series 東光が描いた河内・八尾 夏祭り



恩智祭り 昭和34(1959)年8月1日 写真：田中幸太郎

ようやく熱気にみちた河内の夏がもどってきます。今も昔も河内の人々の夏の楽しみは、ふとん太鼓やだんじりが出される“祭り”です。

特にふとん太鼓が出されることが多い夏祭りは猛暑の中で若者たちが重厚なふとん太鼓を担ぐ姿は勇壮です。

河内・八尾の文化・人まちを愛した今東光も、小説の題材に好んで祭りをういしましたし、自らも祭りが大好きで、すすんで人々に交じりました。

…僕は禿げ頭に鉢巻をして、ワイシャツの胸をひろげ袖まくりして、ズボンを穿いて、靴をはいた恰好で太鼓の担い棒を担いだ。

「いてエッ」途端に悲鳴をあげてしまった。肩にあたる担い棒の痛さというものはお話にならない。「あ。やっせえ。やっせえ」と掛け声だけは大に頑張るが、とても、まともにかつげたものじゃない・・・(「河内音頭(小説河内風土記巻之一)」より)

こうして皆に交じって見聞きし、ときに自ら経験したことを、多くの作品に反映させていたのです。今東光文学のなかには、貴重な河内の記録がたくさん散りばめられています。

…三間ほどの檣に紅い酸漿提灯をつけ、その上から河内音頭が朗々と流れた。その下に太鼓台を据え、三人の若い衆がそれぞれ撥を振り、まるで踊るような所作をしながら叩いていた。踊りの輪が三重にもふえて踊りがはずんだ。

「踊ろうな」近所の娘等は新しい手拭をかぶって、糊のきいた浴衣に、赤い帯をしめ、胸ふくる想いで誘った・・・(「春泥抄」より)

かつて昭和20年代頃、八尾に暮らす人々の記憶をたどると、気温が30℃を超えるのは稀のようで、近年の夏の猛暑からは想像し難いことです。

文学鑑賞をしながら、東光の描いた時代について興味を持ってもらえれば幸いです。

(担当:岡本)



今回の企画展で初めて展示された「肖像画」は弘前の藤田家で保管されていたが、令和4(2022)年藤田家にゆかりのある方から、当館に寄贈いただきました。

画は東光の青春期を垣間見ることができる貴重な作品です。青森県弘前の母方の伯父(東光の母・綾の兄・伊東重は、青森病院長や弘前市長、衆議院議員等をつとめ、幼稚園も開設した名士でした。藤田家は伊東家のもとにつとめており、その親交により藤田春吉氏が東光の画のモデルになりました。



今東光21歳時の油彩「藤田春吉氏の肖像」大正8(1919)年

東光は大正7(1918)年20歳の時、二科展に応募するも落選、絵画の世界からは遠ざかったといわれますが、その後も関心を捨ててはいなかったことが分かります。デッサンを自身の小説の挿絵に用いたり、晩年78歳の昭和51(1976)年には第61回二科展に「裸婦」が60年越しに入選するなど生涯、画に取り組みました。

十七歳で上京した東光は、画家を志しながら多くの文化人や、後の文壇の花形たちと交わり、共に刺激し合い切磋琢磨しました。「僕ときては諸方の学校を退学処分になって万年浪人だ。ようやく近ごろになって川端康成や鈴木彦次郎や石浜金作や酒井真人その他の文学仲間を得たものの、いずれも山のものとも海のものともつかない連中だった。」(『青春放浪』)

『100年といふこと』

今年、映画監督の鈴木清順氏が生誕100年を迎えます。

監督は今東光原作作品を『悪太郎』(1963年)『悪太郎伝 悪い星の下でも』(1965年)『河内カルメン』(1966年)を、日活で映画化しています。その作品は、清順風ともいえる独特の映像美によって、東宝や大映作品とは異なっているのが特徴です。

生誕100年といえば、司馬遼太郎氏も生誕100年を迎えており、二人の出会いが「河内の奇跡」であり、郷土史近代遺産として語り継ぐべき逸話にあふれています。

100年つながりでいえば「文藝春秋」も創刊100年、昨年には「週刊朝日」も100年を迎えましたが、こちらは残念なことに五月末で休刊してしまいました。「週刊朝日」は東光が「みみずく説法」『悪名』と人気作を連載し、司馬遼太郎氏も『街道をゆく』という人気シリーズを連載した老舗雑誌だっただけに、今回の休刊ニュース

には時代の移ろいを感じずにはおれません。

100年前、東光は二十六歳で文藝春秋の創刊に参画し、菊池寛や芥川龍之介、川端康成、横光利一と肩を並べ、切磋琢磨しながら、文筆で身を立てようともがいていました。

元号でいえば大正12年。すでに明治が去ってからひと廻りの年が巡っていることや、この年の9月に関東大震災も起きることなど、歴史は同じ一瞬など微塵もなく進んできたのです。

東光たちが駆け抜けた明治・大正・昭和という時代を感じながら、様々な100年に思いを馳せれば、平成・

令和へと受け継がれてきた文学遺産と郷土文化の豊饒な恵みは、余聞からいづれ養分になることをお約束します。

そんな思いで「東光余聞」始めます、お楽しみに。



今東光が出会った人々/今東光資料館